

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22592508

研究課題名（和文）

思春期の子どもに関する発達課題や諸問題に対応できる子育て支援システムの構築

研究課題名（英文）

Construction of a Child-rearing Support System as an Aid for Parents to Deal with Sex-related Developmental Issues and Problems in Adolescents

研究代表者

岡崎 愉加 (OKAZAKI YUKA) 岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：50224001

研究成果の概要（和文）：思春期の性に関する子育て支援システムの構築に向け、母親が求める支援、養護教諭・教諭や助産師・医師の親への支援に対する考えを明らかにした。母親は男子の心理や子どもを取り巻く性の現状、子どもへの教え方を知りたいと思っていた。養護教諭らは、子どもを通して親を支援するという考えで、授業参観などを活用していた。しかし、専門家との連携不足が支援を困難にしていた。助産師らは、親子の信頼関係を築き、思春期に子どもと向き合うための準備ができるような支援が必要であると考え、学校と連携しようとしていた。以上の成果から、子育て支援システムとして、養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸とした支援モデルが考えられた。そして、子育て支援プログラムとして、中学生の母親を対象とした座談会を実施して評価した。座談会は高評であり、参加した母親は子育てを見直す機会になり、専門的知識や情報を得て、これからの子育てに役立つと考えていた。

研究成果の概要（英文）：This study elucidated the type of support desired by parents and the opinions of school nurses, teachers, midwives, and doctors regarding support for parents in order to construct a child-rearing support system to deal with sex-related issues in adolescents. Mothers wished to know about the psychology of boys, the state of sex-related education, as well as the recent influences surrounding children and methods of educating them about sex. School nurses used methods such as class visits, with the idea of using opportunities to educate children as a supportive measure for parents. However, this support was difficult because of the lack of coordination with experts. Midwives were attempting to cooperate with schools because they considered it necessary to provide support that helped in building a relationship of trust between parents and children and prepare the parents for confronting the challenges of adolescence. On the basis of these results, a support model focusing on cooperation between school nurses and midwives was created as a child-rearing support system. In addition, this study implemented and assessed discussion meetings with mothers of junior high school students as part of the child-rearing support system. The discussion meetings were evaluated in detail, and, because these provided an opportunity for mothers to review their child-rearing abilities in addition to gaining specialist knowledge and information, the mothers felt that such discussion meetings would be useful in developing their future child-rearing.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2011年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2012年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：助産学、母性看護学、家族看護学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：思春期、性、子育て支援、親、家庭、性教育、養護教諭、助産師

1. 研究開始当初の背景

「若者の性」白書¹⁾によると、高校生の男女交際では、性交へのプロセスが当然のようになりつつあるといわれ、高校3年の終わりまでに性交経験がある子は約40%に達している²⁾。10代の人工妊娠中絶や性感染症の罹患、また、デートDV³⁾などの問題が顕著化し、予防策として性教育の必要性が高まっている。

性教育は、いのちの尊さを体験的に学び、まず自分を大切に思い、そして相手を思いやる心をもつことが基礎であり、子どもが成長していく過程で自然に身につくことが望ましい。このような意味で、性教育は家庭から始まるといえ、親の参加が不可欠である。しかし、親世代は十分な性教育を受けていないものがほとんど⁴⁾で、どのように取り組めば良いか悩む親も多い^{5,6)}。親子関係の問題が思春期の性の問題に関与しているという報告⁷⁾からも、思春期の子をもつ親への支援は重要な課題である。

性教育の具体的な教育内容や方法は確立されておらず試行錯誤の中で実施されているが、その取り組みは学校や医療中心で考えられている。性教育の方法についての研究は多く、親を含めた地域ネットワークづくりの必要性を述べているものはある⁸⁾が、具体的なシステムづくりを目指した研究はほとんどない。以上のことから、家庭と学校と医療が連携した子育て支援システムづくりを行うことが重要と考える。

文献

- 1) 財団法人日本性教育協会編、「若者の性」白書—第6回・青少年の性行動全国調査報告—、東京、小学館、2007
- 2) 上村茂仁、インターネット・メール、思春期学、25(1)、43-46、2007
- 3) NPO法人DV防止ながさき、デートDVに関する意識調査、2006
- 4) 齋藤益子、他、中学生をもつ親の性意識、思春期学、22(2)、268-274、2004
- 5) 齋藤益子、他、中学生をもつ親の二次性徴発現時の子どもへのかかわりおよび性に関する子どもとの会話に関する検討、思春期学、23(1)、154-160、2005
- 6) 岡崎愉加、他、家庭における性教育の実態、岡山県母性衛生、24、54-55、2007
- 7) 杉田与志子、他、家族関係の満足感と高校生の性意識・性経験 群馬県の一男女共学高校2年生の調査より、助産婦雑誌、56(9)、767-771、2002

- 8) 平岡友良、中学生・高校生・短大生・父母における性および性教育に関する意識調査、思春期学、23(1)、161-170、2005

2. 研究の目的

思春期の子どもの性に関する発達課題の達成や、諸問題（望まない妊娠・性感染症・デートDVなど）の予防あるいは対処行動ができるような家族機能の向上をめざし、家庭と学校と医療が連携した子育て支援システムの構築を最終的な目的としている。今回の研究期間内では、まず、思春期の性に関する子育て支援システムの構築に向けた支援モデルの構成要素として、親が求めていること、学校（養護教諭・教諭）や医療（助産師・医師）の支援に対する考え、家庭と学校と医療の連携に関する現在の問題点などがあると考えられるため、それらを明らかにすることを目的として、研究(1)と(2)を実施した。その結果より、家庭と学校と医療が連携した子育て支援システムの試案として、養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸とした支援モデルが考えられた。そして、思春期の性に関する子育て支援プログラムとして実施した座談会の内容と座談会で得た知識や情報の伝達について評価し、今後の課題を明確にすることを目的として研究(3)を実施した。

3. 研究の方法

(1) 親が求めている思春期の性に関する子育て支援

平成23年2月～7月に、A県3市在住の思春期の子どもをもつ母親17名（平均年齢42.6±3.1歳）に、座談会形式で60分程度のグループインタビューを、1グループ5、6名の構成人数で、3グループ実施した。研究参加者には、家庭における性教育に関して、困っていること、どのような支援があればよいかについて、自由に話してもらった。インタビューは録音し、逐語録から、困ること、親が求めている支援に関連した言葉を抽出してコードとし、次にコードの相違点・共通点について比較・分類、抽象度をあげて、サブカテゴリー、カテゴリーとした。

グループインタビューの分析結果をもとに、親が求めている支援をより具体的に明らかにするため、無記名自記式質問紙を作成した。平成23年11月に、研究協力依頼文・無記名自記式質問紙・返信用封筒を入れた封筒をB市の小学生・中学生の保護者1000名に配布した。11月末までの返信は252名（回収

率 25.2%) からあり、その内、母親かつ性教育に関する仕事経験のない 220 名を分析対象とした。分析には統計ソフト SPSS17.0 を用いた。また、平成 23 年 12 月末までに回収された調査票の内、性教育に関する仕事経験がなく、かつ、家庭で性教育を実施したことがある親は 94 名 (母親 88 名・父親 6 名) であった。その内、自由記載欄に、難しく感じたことやうまくいかなかったと思うことを記述した 55 名 (母親 52 名・父親 3 名) を対象として、記述内容を質的帰納的に分析した。

(2) 専門家による性に関する子育て支援

平成 24 年 1~2 月に A 県の小学校・中学校・高等学校に勤務する養護教諭 4 名と教諭 1 名に対し、約 1 時間の半構成的面接を実施した。分析は逐語録を作成し、親への支援内容、支援を困難にする要因、親への支援についての考えが語られている部分に着目して質的帰納的に分析した。本研究における「親」とは「子どもに対して親役割を果たしている家族、保護者」とする。研究参加者の年齢は 40 代 3 名、50 代 1 名、60 代 1 名である。

平成 23 年 8 月~平成 24 年 3 月に性教育に携わる A 県の助産師 3 名と医師 1 名に対し、約 1 時間の半構成的面接を実施した。分析は逐語録を作成し、助産師や医師が必要と考えている親への支援について語られた部分に着目して質的帰納的に分析した。研究参加者の年齢は 40 代 1 名、50 代 2 名、60 代 1 名である。

(3) 思春期の性に関する子育て支援プログラムの評価

平成 24 年 7~12 月、A 県 3 市在住の中学生の母親を対象に 1 回の参加者を 6 名程度とした座談会 (テーマは、思春期の男子を育てる、または、思春期の女子を育てる) を 7 回開催した。座談会ではテーマにそって専門家が知識や情報を提供しながら参加者が自由に話し合った。座談会の内容については、終了直後に無記名自記式質問紙を用いて調査した。参加者合計 40 名中 38 名 (回収率 95%) を分析対象とした。また、座談会で得た知識や情報の伝達については、無記名自記式質問紙を 1 ヶ月後に郵送法にて回収した。回収された 27 名 (回収率 67.5%) を分析対象とした。量的データは単純集計し、自由記載欄に記述された内容については、質的帰納的に分析した。

なお、(1)~(3)のすべての研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 親が求めている思春期の性に関する子育て支援

グループインタビューから、親が求めている支援として以下のことがわかった。知識では、子どもの現状、具体的な性に関する知識、親としての対応の仕方について知りたいと思っていた。相談者としてはママ友達や先輩ママに相談する一方で、専門的な知識を持っている人に相談できるとよい、思春期の子育て相談があるとよいと思っていた。また、情報交換の場があればよいと思っており、少数で、学区を越えた母親との情報交換を希望し、得た情報は友達や家族に話したいと思っていた。

無記名自記式質問紙調査からは、以下のことがわかった。母親は「男子の心理 (62.3%)」や「子どもを取り巻く性の現状 (61.8%)」、「出会い系サイトなど有害サイト (40.9%)」や「子宮頸がん (38.2%)」「エイズ以外の性感染症 (33.6%)」などについて知りたいと思っていた。子どもには、「生命の大切さ (75.5%)」「男子と女子の心理的な違い (50.5%)」「男女交際について (42.7%)」などを教えたいと思っていた。必要な支援では、81.4%の母親が「子どもへの教え方 (対応の仕方)を教えてほしい」と思っており、57.7%は「性に関する知識を教えてほしい」など学ぶための支援も希望していた。助産師に対しては、62.3%が「子どもに性教育を行ってほしい」と思っていたが、35.9%の母親は「保護者にアドバイスしてほしい」と思い、32.7%は座談会に参加したいと思っていた。また、自由記載から、家庭で性教育を実施した親は、「知識や経験がないこと」「子どもに耳を傾けてもらうこと」「わかりやすい言葉で話すこと」「子どもとの認識の違い」「話をする時機やどこまで教えるか」ということについて、難しく感じたり、うまくいかなかったと思ったりしていた。

以上より、親に必要な支援は、性に関する正しい知識や最近の子どもの現状、子どもへの教え方について知る機会を作ることであり、知識の提供や母親同士で情報交換をしながら思春期の性に関する子育てについて考える座談会の実施が支援策の一つとして考えられた。また、座談会に参加した母親が情報伝達することにより、参加できない母親等への支援につながる可能性もあると考えられた。

(2) 専門家による性に関する子育て支援

養護教諭や教諭が行う親への支援内容としては、「講演会と授業を活用して支援する」「親子関係に配慮しながら対応する」「親からの相談に対応する」「性に関する情報を知らせる」「担任と養護教諭が共同で支援する」「学校外の専門家と協力する」の 6 カテゴリーが抽出された。支援を困難にする要因としては、「親の価値観の相違」「親のニーズの把

握困難」「養護教諭や教諭の協同不足」「専門家との連携不足」の4カテゴリーが抽出された。親への支援についての考えは、「親への支援は必要である」「子どもを通して親を支援する」「ネットワークシステムが必要である」の3カテゴリーが抽出された。養護教諭や教諭は、子どもを通して親を支援するという考えで、性教育の講演や授業参観を活用したり、親子関係に配慮しながら対応したりしていたが、親の価値観の相違や専門家との連携不足が支援を困難にしていた。

助産師や医師が必要と考え行っている親への支援としては、「性に関わる専門職としての支援」「妊娠期から親子の信頼関係を築き自立に向かえる支援」「学校や行政との連携による支援」の3カテゴリーが抽出された。助産師や医師は、性教育は思春期に限らず、育児の中で親から子へ自然に伝えられていくものと捉えていた。そのためには親子の信頼関係が重要であり、信頼関係を築いていけるよう、妊娠・出産の時から支援を行い、困った時には相談ができる環境づくりに気を配っていた。また、行政の力を借りながら親子の問題に適した社会資源を探したり、性に関する情報を学校（養護教諭ら）に発信したりしていた。

以上より、家庭における性教育には子どもと向き合う親の態度が重要であり、そのための準備をしておくような子育て支援を行うことが必要と考える。親に必要な支援は、性に関する正しい知識や最近の子どもの現状、子どもへの対応の仕方や教え方について知る機会を作ることであり、学校と医療が連携して、専門家による知識の提供や親同士で情報交換をしながら思春期の性に関する子育てについて考える座談会を実施することが支援策の一つとして考えられた。

(3) 思春期の性に関する子育て支援プログラム（座談会）の評価

座談会直後調査の対象者の平均年齢は42.4±3.1歳であった。座談会の時間60分は適切が94.7%、場所は適切が100%、参加人数は適切が86.8%であった。講師の話は参考になったが97.4%、保護者同士の話は参考になったが68.4%であった。総合的に判断して座談会に参加して良かったは78.9%、どちらかといえば良かった21.1%であった。今後も参加しようと思うは68.4%、どちらかといえば思う26.3%であった。ママ友達等に座談会への参加を勧めるは42.1%、どちらかといえば勧める50%、どちらかといえば勧めない7.9%であった。

1ヵ月後調査では、座談会に参加したことを誰かに話したものは85.2%であった。話した相手は父親73.9%、子ども60.9%、ママ友達47.8%であった。講師から得た知識や情

報を話したものは81.5%であった。話した相手は父親65.2%、子ども56.5%、ママ友達47.8%であった。保護者から得た知識や情報を話したものは44.4%であった。話した相手は父親50%、子どもとママ友達が同率41.7%であった。話した時のママ友達等の反応は、座談会の内容に興味や関心がある様子66.7%、座談会に興味や関心がある様子33.3%、座談会に参加したような様子13.3%、特に関心がない様子6.7%であった。

直後調査の講師の話に関する自由記述内容からは「専門的な知識や情報が得られた」「思春期の子ども話題にしづらい内容が聞けた」「思春期の子育てを考え見直す機会になった」「これからの子育てに役立つ」の4カテゴリーが抽出された。保護者同士の話に関する自由記述内容からは「我が家以外の子どもの様子が聞けて安心した」「同じ年頃の子どもをもつ親の話や気持ちが聞けた」の2カテゴリーが抽出された。1ヶ月後調査で座談会の感想等の自由記述内容からは「話す機会の少ない親同士で交流できる」「性に関する専門的知識や情報が役立つ」「座談会をきっかけに性教育を身近に考える」「思春期の性の不安に向き合える」の4カテゴリーが抽出された。

以上より、支援策の一つとして座談会は効果的と考えられたが、親同士の話が活発になるような工夫が今後の課題である。座談会で講師から得た知識や情報を他者に話した者が8割以上おり、その相手は父親や子どもが多かったことから、家庭における性教育に役立ったと考えられる。今後はより多くのママ友達等にも伝達できるような働きかけが必要である。座談会に参加することは子育てを見直す機会になり、話題にしづらい思春期の性に関する専門的知識や情報を得て、これからの子育てに役立つと母親は思っていた。また、同じ年頃の子をもつ親同士が語り合うことは安心感をもたらしていた。これらは1ヶ月後も持続していたことから、座談会は思春期の子育て支援として効果があると考えられる。

(4) 思春期の性に関する子育て支援システムの提案と今後の課題

これまでの研究成果から、学校と医療の連携により家族機能の向上をめざす思春期の性に関する子育て支援システムの試案として、養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸として学校と医療が連携し、親を中心とした地域における家族の子育てを支援することによって、思春期の子どもに関する発育・発達・健康を支援するモデルを考えた。今後は、支援モデル事業を試み、縦断的に評価しながら、支援システムの構築をめざす。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計8件)

- ① 岡崎愉加、家庭における性教育—養護教諭・教諭が行う親への支援内容と支援についての考え—、第32回日本看護科学学会総会・学術集会、日本看護科学学会、2012.12.1、東京都
- ② 岡崎愉加、家庭における性教育—親が難しく感じたことやうまくいかなかったと思うこと—、第53回日本母性衛生学会総会・学術集会、日本母性衛生学会、2012.11.16、福岡市
- ③ 岡崎愉加、思春期の性に関する子育て～親が必要と考えている支援～、第31回日本思春期学会総会・学術集会、日本思春期学会、2012.9.2、軽井沢市
- ④ 岡崎愉加、家庭における性教育～親が求める支援～、第28回岡山県母性衛生学会総会並びに学術集会、岡山県母性衛生学会、2011.11.5、岡山市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡崎 愉加 (OKAZAKI YUKA)

岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：50224001